

「親切の瞬間、親切の感覚」

鹿児島県立鶴丸高等学校 三年 田中 美晴

ガツシャーン。がくと何かに乗り上げたかと思うと、私の体は放り出されてしまった。顔を上げると、少し人だかりができていて、その視線が恥ずかしかった。

「大丈夫ですか。怪我はありませんか。」手を取ってくれる人、荷物を拾ってくれる人、自転車を起こしてくれる人。たまたま通りかかった見知らぬ人が、手助けをしてくれたにも関わらず、恥ずかしさと、申し訳なさとで、一刻も早くその場を立ち去りたかった。「大丈夫です。ありがとうございますました。」

平然を装い自転車を押し始めた私だが、腰のあたりは鉛のように重く、足がじんじんと痺れ、何かが飛び出てきそうだと。人がいないことを確認し、自分の惨めな姿をまじまじと見つめた。制服の砂を払おうとした手の平は、擦りむいて血がにじむ。スカートの裾をそっとめくると、膝からは血が噴き出していった。

「痛そうですね、本当に大丈夫ですか。」

丁寧な口調だが、かわいらしい声だ。声の主は、ランドセルを背負った女の子。

「大丈夫。ちよつと自転車で転んじゃったの。」

「でも、お姉ちゃん、けがしていますよ。」

女の子は、制服のポケットからティッシュを出しながら、私の傷口を気遣ってくれた。一枚もらって、傷口を押さえた。ああ、なんて優しい感触。思わず涙があふれてきた。

「そんなに、痛い？誰か呼んでこようか？」

だんだんと、女の子との距離が縮まる。「違うの、違うよ。嬉しいの。」

泣いているのだから、笑っているのだから、自分自身も訳が分からなくなった。きつと、女の子には、変な女子高生と映っただろう。それでも、じつと私のそばにいてくれた。

落ち着きを取り戻し、自転車を押し始めた。

「ありがとうね、本当にもう大丈夫。あなたも気をつけて帰ってね。本当

にありがとう。」

「勇気を出して、お姉ちゃんに声をかけてみてよかった。断られたり、ツンとされたりしたらどうしようって怖かったの。でも、お姉ちゃん、親切そうに見えたから。」

親切してくれた人に、親切そうに見えたと言われるなんて、また涙がこぼれそうになった。あの子が親切を行動に起こすには、きつと、相当の勇気がいっただろう。幼い私がそうだったように……。

私はこの出来事を作文に書き留めようと決めていたが、鉛筆は思うように進まない。小さな親切作文コンクールに出会ったのは、小学一年生のとき。友達の入賞作品を読んだとき、私も書いてみたい、と思った。翌年から親切について考えるも、結局一つも書けなかった。中学・高校に入ると、連休中の課題となり、いよいよ書かなくてはならない状況に追いやられ、今に至る。覗き込んできた母が

「小学生の頃、ママに頼つてくると『親切というのは、作文を書くためにあるものでもなく、賞を取るためにするものでもないのよ』と言ったこともあったね。でもね、美晴の書いた作文を読むと、そうだった、そんな気持ちになったことがあった、つて、子どもの頃の純粋で真っ直ぐな思いやりや勇気を思い出すことがで

きたわ。大人になって、日常の中で、体裁を考えたり、理屈や立て前を気にしたりして、親切の瞬間を見逃してしまうことが多くなったな、つて、反省させられたよ。」

と、肩をもんでくれた。女の子が私にしてくれた親切を通して、私も母に似た気持ちになったのは、少し大人になったということなのだろうか。だが、大人になると「親切の瞬間を見逃してしまうことが多い」のならば、それは、あまりにも残念なことだ。この作文コンクールは、毎年、親切について考え、それまでの自分の生き方を振り返り、その後の生き方を振り返り、その後の生き方を切り開く道標となった。女の子がそつと寄り添ってくれたとき、感じることに、思い起こすことのできた親切の感覚を絶対に忘れることなく、大人への階段を上つていこう。これが、私の書き納めとなる。そして、今、鉛筆を置く。

「審査評」

「親切の循環」という発想がこの作文の土台となっています。その土台を支えるエピソードが、横断歩道で止まってくれた運転手に対して歩行者がするおじぎです。鹿児島では目にする機会がよくありますが、県外では当たり前の行為ではないことがこの作文からわかります。親切の循環が行われていくには、それを生み出す人と、つなげていく人の存在が大切で、そういう人であり続けたいと願う田野さんの思いが素敵です。